



talk session at moriyama

もりやまde持続可能な 子育て&教育対談



守山市を拠点に子育て世代と深く関わることを共通項として活動する二人。
SDGsやすまいる・あくしよんの視点も交えて、地域、子どもたちの未来について語り合いました。

廣瀬—ママパスポートでは今年度より子育て中のママやパパに地域の中の身近なSDGsの取組みのこを知ってもらえるようなきっかけづくりをしたいと考えています。やすな先生はバレエを通じてみんなに幸せな環境をつくるという意味でSDGsの本質と結びついているというも感じています。

やすな—私もバレエ教育とSDGsはとても接点が多いと感じています。目標4(質の高い教育をみんなに)では、お金の豊かさに関係なく文化芸術に投資することが当たり前環境をつくっていきたくて、目標11(住み続けられる街づくりを)では自分の夢が仕事にできるような制度をつくっていきたくてですね。従来の考え方だけでなく、会社で働きながらアーティストを目指す環境づくりや新しい制度ができないかなと思っています。

廣瀬—スポーツの世界では実業団などがありますが、文化芸術の世界ではまだあまり聞きませんね。

やすな—ぜひ県内の企業の中から『アーティスト

制度』を実現させることが私の夢であり、使命だと思っています。目標17(パートナーシップで目標を達成しよう)はバレエ教育においても広い定義でとらえることができます。男女で踊ることはもちろん、グループで踊る、親と子の協力…。相手の呼吸や間を感じて動くことや目上の方に対する姿勢もひとつのパートナーシップです。様々なパートナーシップを理解した子を社会に送ることで、会社としては社員教育の軽減などのメリットもあります。2022年はバレエとは別のジャンルの人や企業と組んでやってみたいですね。

廣瀬—これまでの常識が通用しなくなった今の時代こそ、新しい常識や制度をみんなで作り出すチャンスの時なのかもしれませんね。SDGsの他にも滋賀県が独自で策定している「すまいる・あくしよん」も今こそ学校や地域だけでなく企業も意識して取り組むことが大切だという声もあがっています。



guest interlocutor

廣瀬香織

一般社団法人ママパスポートコミュニティ代表。各地域でのママパスポートの発行・運営を支援し、子育てを中心としたまちづくりを実践。



interlocutor

やすなみずほ

元劇団四季ダンサー。モリヤマシティバレエ主宰。公演プロデューサーなど地域の文化芸術分野の熟成にも尽力。

やすな—「すまいる・あくしよん」にある7つの行動指標の中で(02 今の気持ちを伝えよう)は大切なことだと思います。いじめや引きこもり、ヤングケアラーなど子どもたちが「助けて」「つらい」と声をだせない状況が問題になっています。コロナ禍では親、特にお母さんがひとりですべての気持ちを抱え込んでしまっていることを強く感じるのもっと地域全体ですべてを育てる必要があると思います。

廣瀬—運動会や合唱コンクールなどの学校行事やピアノ、ダンス、バレエの発表会など子どもたちの表現の機会がたくさん奪われましたね。

やすな—子どもの表現力が臆病になっていきますね。アウトプットが苦手になり、自己実現からかけ離れているのではないかと懸念しています。

廣瀬—子どもの頃にいろんな体験して好きなこと、面白い、楽しいと思えること増やしてあげることが子どもたちの未来の可能性を広げるために必要だと思っています。「06 わくわく感動する気持ちを持とう」は

大人たちが意識して機会を作っていきたいといけませんよね。

やすな—長年バレエの教室を主宰し、たくさん子どもたちと関わってきた中で子どもには1、2年間の成果を求めるよりも信じて待つことが一番大事なことだと教えられました。特に生まれてから10歳頃までは未来のための投資の時期です。すぐに成果は出ません。17歳、18歳頃まで周りは信じて待つことが子どもたちが自分らしく、たくましく輝くために一番大事なことだと思います。

